

編 集 後 記

胃腸疾患をとりあつかう場合、機能的面からの考慮が必要であることはいままでもない。この点本号の綜説テーマとして、胃の食物輸送機能がとりあげられたことは、まさに当をえたものといえる。示された3つの論文はいずれも力のはいたものであり、非常に参考になった。

座談会では1月号にひきつづき、和歌山における42年度消化器病学会秋季大会の主題中、胃潰瘍及び胆石症の手術適応の問題、更に慢性胃炎について語られているが、いずれも今後なお検討すべき多くのことがらを残しているように思う。この座談会のなかで、悪性潰瘍が治癒所見を示すことがある点についてのべられているが、筆者も昭和37年以来、自らの苦い体験からこの点を重視し指摘してきた。生体というのは、たとえそれが悪性のものであっても、なんとかしてなおそうとする方向にある機転が働くものだと考えているので、この事実も不思議ではないと思っている。ただこのことを頭におくとき、胃潰瘍の治癒判定、経過の観察はよほど慎重でなければならない。

症例も興味あるものがあつた。胃肉腫は注意深くみておれば、案外多いものであり、早期発見も可能である。胃アニサキス症も、気をつけていると遭遇するものである。一見粘膜下腫瘍を思わす隆起性病変の表面に陥凹をみとめる場合、一応本症をも念頭におく必要がある。

連載されている各地の消化器病研究会や懇談会の記事は、読んでいて楽しい。会の様子などが目に浮ぶ。苦労話や悩みも相通ずるところがあり、それが一層同好者としての親しみを感じさせる。

<並 木 正 義>